
最強の脇役の人生

マコT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の脇役の人生

【Nコード】

N1663Y

【作者名】

マコト

【あらすじ】

車に轢かれ、神様によって異世界　もう一つの日本に転生した少年紳士、西院司月。彼の転生した世界は、魔法と危険の蔓延る、幻想した世界だった。彼はこの世界で、学園に通い、大事な友人達と出会う。彼は友人を守るため、密やかに戦い続ける。

処女作で、最強物です。この小説は、あまり考えずに気楽に読む事をお勧めします。タイトル変えました。

第1話（前書き）

はじめましてマコトといいます。これは最強物で、作者の処女作です。気楽にかいていきますので、皆さんも気楽に読んでいってくださいと幸いです。

第1話

人は死ぬ。

それはもう、多種多様な方法で。なんでこんな事冷静に考えているかというと。

『おい、子供が轢かれたぞ！』

『おええ……………』

俺の視界は横たわり、一切の身動きを許さない。俺を見る恐怖の視線、必死の形相で俺を揺する男性、凹んだトラック。察するに、俺は車に轢かれたらしい。何故轢かれたかは、わからない。

『大丈夫！？』

おっ……………これは……………！

ぼうつとしている意識をフル活動させ、視界から入る情報を脳内メモリーに保存出来るよう万全にする。もうちよい、もうちよい左に来て、お姉さん……………！

あ、待って、右に移動すんな……………お、おっさんナイス！おっさんのおかげでお姉さんが左に移動した。

しゃがむスカート姿のお姉さん。横たわる俺。動かない体。そこから至るところ結論は……………！

そう、男子が求めた究極の黄金理想郷トライアングルが見えた。まさか……お姉さん、見た目に反して、かなり卑猥で妖艶なトライアングル……良い仕事してますね………最早悔いはない、がふつ。

『おい少年！目を開けるお！』

『なんで幸せそうな表情なの！？』

「……はっ！？黒！？」

「……いっそ清々しい程だね」

「おっ」

目の前にあったのは黒き理想郷ではなく、金髪碧眼のゴスロリ少女だった。赤い花弁の髪飾りがアクセントになっていて、可愛い。

「私は神様さ」

「ほー、神様かー、偉いでちゅねー。さ、それよりそのひらひらスカートから覗く魅力的で雪のような穢れなく美しい御足を見せなさい、いや、魅せなさい」

「……現実逃避をしても何も起こらんぞ」

ですよねー、まあ嘘ではないんだけども。

「でもカミサマ？いきなり目の前に現れたゴスロリ少女に私は神だ、とかドヤ顔で言われて、信じられます？俺視点で考えてください」

「……さて、君を呼んだ理由だが……」

「同意とみて、宜しいですね！？」

「うるさいッ！私にだって間違いはありゆ……」

お、噛んだぞ、あのカミサマ噛んだ。羞恥に頬を染めてわなわな震えながらスカートを握り美少女カミサマまじ可愛い。うう……とか言いながら睨めつけてくるけど全然怖くない、寧ろ可愛い。抱き締めたいなあ！カミサマ！

「大丈夫ですよ神様。信じます、信じますから泣かないで」

「……………誠か？」

かわええええ！なにあれ、涙目＋上目使いに羞恥！？あれですか、新型兵器ですか。新型兵器KAMISAMAか、これは全世界が萌えるぞ。俺の可能性の獣もデストロイモードに移行しそうです。

「誠です、誠も誠、チヨー誠です」

「……………うむ、ならば、良い」

そんな涙目状態で胸を張る神様。でも威厳が感じられない、微塵も。

「で、だ。西院さいいんしじき司月君。君をここに呼んだ理由がある。君は先程死んだ。しかし君には力があるんだ、それは何かわかるかな？」

「……………魔力」

「性力だ」

あるえ？

「君には並々ならぬ性力がある……………まあ所謂エロスだ。エロスを探求しようとする力が尋常じゃない。性力に関しては性を司る神よりも強い」

「……………ほ、褒め言葉？」

「……………私には判断しかねる」

はいはぐらかされました。まあそうでしょうよ、魔力とかそんなフ

アンタジーな物が強いとかならまだしも、性力で。まあ確かにエロスに対する探求心が尋常でないことは否定出来ない。

「で、その性力の異常な強さを、魔力に変えてみないか？」

「……変えられるの？」

「うむ、1エロス＝100マガアだ……あ、今1エロス＝102マガアに変わった」

「株価かつ！」

というか単位が意味わかんねえよ、なんだ1エロスって。

「はっはっは、冗談だよ冗談。ゴッドジョークというやつだ」

わかるかポケエ。と、高笑いする美少女神様に心中で文句をたれる。

「……まあ、変換出来るのは嘘じゃない。いや、変換というよりは反映、か。エロスはそのままだが、そのエロスに比例した魔力が手に入る」

「……一体どれくらい？」

「うむ、常人が発動したら一瞬で昏倒する上級魔法を一日千京回使っても支障がない程だ」

どんだけだよ俺のエロス。

「君には転生する権利がある。魔法のある世界にな」

「……と、言われてもね」

「信じがたいのも無理はない。今まで全く関係のない世界で生きてきたのだからな。ま、夢だと思って気楽に考えるといい」

「……なあ神様、一つ質問がある」

「なんだ？」

俺は真剣な瞳で彼女を見る。喉が乾くのがわかる。これから暴かれる真実、それが彼女の口から果たして告げられるのか、そして俺の考えは確かに存在するのか。緊張する。額に汗が滲むのがわかる。神様も、俺の視線を感じてか、真面目な表情だ。俺は自身の内に秘める躊躇いを、勇気を振り絞って捨て払い、一步、未来へと進む。

「向こうの世界に、女性用の下着メーカーはあるのか？」

結果、神様がずっとこけました。えー、大事な事じゃないっすか。俺にとっちゃその有無によって行くか行かないか決めるくらい大事なんですよ。

「コホン　話を続けよう。君は転生したい？」

「拒否したらどうなるの？」

「ただ単に無の時をさまよい、次の転生のために魂を浄化されるだけさ」

「じゃあ転生を選んだら？」

「記憶をそのままに、最強の力を持って転生、かな。君の世界でいう、所謂強くてニューゲームだ」

なにそれ美味しい。

「色々な神様が君に興味を持っているから、皆君に少しずつ力を貸してくれるよ」

「……なんで俺に興味があるの？ただの紳士だよ？」

「エロ紳士だからじゃないか？」

また笑われる。色々な神様が興味を、ねえ……俺はただ女の子が好きで好きな一般的な紳士だというのに……。

「で、転生するのかい？」

「そつするよ」

「わかった、では、よき第二の人生を送りたまえ」

神様が俺に手を向けると、意識が一気に微睡んだ。混濁する意識の中、思い出すのは……真っ黒な……三角形でした。

どうも、皆の愛する変態紳士、司月です。転生しました。今俺は、綺麗な女性に抱かれています。いや、いやらしい意味ではなく、今は赤ちゃんなのであります。どうやら母親らしい。俺の視界はまだまだはつきりとしたものではないが、顔はすごい美人。夢げで、ガラスのような美しさがある。

合法的にあの美女の豊満な双子山の天然水を啜れるのは嬉しいのだ

が……母親である、俺を産んだ、本物の親である。気恥ずかしいと
いうか、拒絶反応がある。

俺の名前は、司月というらしい。何故かそのままだが……これは神
様の力なのかな？まあ元の名前なのは有り難い、呼ばれ慣れてるっ
て良いね。

しかし……赤ちゃんだからなのか、眠いし腹は減るし……こりゃ数
年はまともにはいかないな。

第1話（後書き）

「そついや下着メーカーは？」

「あるぞ」

「よっしやあああああ！！」

第2話

五年経ちました、どうも甲殻寄生変態獣司月です。成長して、今や色んな知識も得た。勉強は苦手なんだけど、流石にこっちの世界で生きるためには必要不可欠な事だった。

まず、俺の名前は西院司月さいいんしづき。何故か苗字まで一緒という、意味のわからない運命を辿ったようだ。

この世界はどうやら俺が生きていた世界の文明に魔法を足した世界らしい。通信機器であるケータイもあるし、地球だし、日本だし。神様が言うなはこの世界は俺が生きていた世界とは別次元にあるが同じ場所にある世界らしい、わけわからん。

まあ、魔法がある地球って考えれば良い。ただ、生きてる人物は大体違うけど。俺としてはあまり生き方変えなくて良いっていうのが凄く有り難い。

『ほう、なんだこれは』

「あ、それはポテチだよ」

『うむ、中々美味だな』

俺の横に居る黒い猫が、袋から器用にポテチを取り出して咀嚼し、嬉しそうに目を細めた。この黒猫、俺んちのペット兼、死神代k

失礼。ペット兼、神様です。ええ、神様です、あの金髪ゴスロリの。人間の生活に興味があったらしく、神様連合会に、転生させた人間の監視、という名目で俺と一緒にこっちに来た。

今の所、神様で力を貸してくれてるのを羅列してみようと思う、どんな力を貸してくれるかも。

アナト……この金髪ゴスロリ美少女。戦闘に関する力をくれる。

ガイア……地属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『いつも微笑む皆のママン』

トール……雷属性の力とそれに関する武器を貸してくれる。アナト曰わく『エロ親父』

ロキ……幻惑の力を貸してくれ、フェンリルの卵をくれた。楽しい事が好きで、俺に最初に転生させようと画策してた神様。アナト曰わく『オカマナベ』

ヴェルダンデイ……多少の創造の力を貸してくれる。アナト曰わく『運命なんてなんぼのもんじゃと叫ぶ女』

ヴァーユ……風の力を貸してくれる。アナト曰わく『1クラスに良くいる真面目な委員長タイプ』

ルサルカ……水の力を貸してくれる。アナト曰わく『胸に脂肪を蓄えた忌まわしき敵』。凄い私怨が混ざつとる。

スプンタ・マンユ……光属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『優等生……それ以外ない』

アンラ・マンユ……闇属性の力を貸してくれる。アナト曰わく『スプンタ・マンユを勝手にライバル視してるなにか』……なにかって

なんだよ、扱い酷くね？

今の所俺に力を貸してくれるのはこの9柱。ただ、今後の俺の活躍によつては力を貸してくれる神様が増えるようだ。と言つても今のままでも十分過ぎると思うんだがな。というかアナトさんや、あなたの『曰わく』のおかげで神様に対する印象が大分変わりましたよ、無論悪い方向で。

魔法に関してもなんかアナトが知識くれて、特になにもせずとも殆どの魔法が使えるようになった。

因みに俺のエロスを魔力に換算したら無量大数に一番近い不可思議という単位に相当する。上級魔法を一日に千京回使わないと消費し切れず、しかも数時間休めば百京回分回復するとか。もうね、バカか。こんな数字言われても実感が一切湧かない。つか1日千京回とか無理だろ……。この果てしない程のエロス、アルティメットエロス、エターナルエロス。ハンパない。

『そつえば、彼の者は実に珍しい存在だな』

「彼の者？」

『司月の友人、みさきくおん王崎久遠だ』

ああ、あいつか。そう思いながら、俺は思考した。

王崎久遠……俺の幼なじみ。女……じゃない、歴とした男だ。しかも五歳ながらかなりの美形。中性的な顔立ちで、明るい性格。光属性と他の基本属性（炎・水・風・土）に対して才能を持っている。

「珍しい、のか？」

『うむ。精霊に愛されし者、だ。この世界では高名な壬埼家の息子。しかし秘めたる才能は親をも超える』

「へえ、そんなに凄いのか」

『何を言うか。司月、君程珍しい人は居ないぞ。なんせ神に愛されし者だからな』

愛されているというより玩具にされてるように感じるのは気のせいだろうか……ああ、なんか身震いした。なんか神様からの弄ぶような視線を感じる……ってのは自意識過剰か。

『君と壬埼は似ている』

「似てなくね？」

『うむ、顔は全く似てないな。まるで天と地、いや天と地獄だ』

酷い……いや、俺が天っていう場合も　　ないな、有り得ない、絶対がない。なんせ向こうでは不細工で、アナトに聞いた所能力以外向こうとは変わらない、と言われたからだ。両親には悪いが不細工になる自信がある。ああ、ヤバい。泣きたくなってきたよ……。

『しかし私は司月の方が好きだぞ』

「……………」

サワッ

『ツツツ!??ど、どどどこを触っておるー!??』

アナト（黒猫）の尻尾を掴み、にぎにぎしてみるとまるでどこぞのサイヤ人の如く毛を逆立てるアナト。どうやら触覚も猫と同じらしい。

「いやあ、黒猫の可愛い尻尾のさわり心地」

『天誅!』

「ぎゃああああああ!」

顔を爪で引っかかれる。痛い……良いじゃないか尻尾ぐらい!減るもんじゃないだろう!……バチは当たったけどさ。しかし、神様にこんな事したの、俺が初めてじゃね?

『全く……猫の尻尾はでりけえとなんだぞ。触る場合は許可を取れ許可を』

許可を取れば良いんだ……。と尻尾をフリフリしながらツーンとそっぽを向くアナトに呆れながらも自然と笑みが浮かんだ。

因みに。アナトの話し方は俺の脳内に直接語りかける感じで、他の誰にも聞こえる事はない。俺も脳内会話が出るんだけど、こういう二人きり（一人と一柱?それとも一匹?）の時は面倒なので口で会話をしている。

『司月ー、ご飯よー。アナトちゃんもよびなさい』

母さんからお呼びがかかった。飯か……そういやもう夕方だったな。俺は五歳ながら非常に成長が著しいと思われているらしく、もう一人部屋も貰っている。もう一部屋空いているのだが、そこは弟か妹の部屋になりそうだ。俺は一人っ子だったからなあ、弟でも妹でも良い。

あ、でも妹のが良いな、いや妹一択だ。幼児の頃は『にいたまー』とか言いつつ向日葵でさえ顔を背ける程眩しい笑顔を俺に、俺だけに振りまき。

少し成長したら『お兄ちゃん』とか言いながらガラスですら映せなくなるほど可憐な表情で俺に抱き付きながらも一緒に風呂に入った。

また成長したら『お、お兄ちゃん……』とか炎ですら色褪せて見える程頬を羞恥で真っ赤にしながらも愛を示さずには耐えられないという苦悩の狭間で悶絶する様子に萌え。

中学生くらいになったら『なんですか、兄さん』とかクール系になって俺の飯とか部屋掃除とか完璧に出来る子になるんだけど俺のベッドに隠したエロ本を見つけて羞恥心を隠しきれず恥ずかしがりながら俺を問い詰め

「早く来なさい」

「痛っ!？」

頭に鈍い衝撃が走った。さすりながら顔をあげ、俺は一瞬にして汗が噴き出る感覚に陥った。ヤバい、阿修羅がいる　ああ、俺の母さんの西院胡仲さいいんこなかだった。この人は普段は滅茶苦茶優しくして美人な

のだが、食事の事とかになると怒る、怖い。

アナトに『あれは ヤバい』とまでいわしめた人物であるからして、相当なのだろう。

アナトは俺の使い魔、という事になっている。使い魔というのは魔導師 魔法を操れる者を魔導師と呼ぶ の眷属、使役しているモノの総称。契約を結べば戦闘だと有利だし、単に相性が良かったからっていう場合もある。

この事についてアナトは『神が人の下に立つ、か……面白いではないか』と言っていたので、あまり気にしなくても良いみたいだ。

俺は襟首を掴まれ、ずるずると引き摺られていく。シクシクと涙を拭いているような真似をしながら他人を装う黒猫をむんずと掴み、道連れにした。どうせ飯だ、お前も来なきゃいけないんだからな。

勿論ご飯は美味しかったです。ママンは偉大である、時に神様よりも偉大だ。俺にはそれが良くわかる。

第3話

13歳になりました、皆さんおはようございます。赤い変態のシツキです、紳士タイプとして三倍になります、何かが。

一気に倍以上飛んだのはヒミツ、大人な事情。別段変わった事は…
…無きにしも非ず、かな？俺やアナトは全く変わってない、が。

「にいさま」

「おうおうどうした愛しのマイエンジェル」

女の子が俺に抱きついてくる。黒髪をツインテールに結い、花の髪飾り　アナトがプレゼントした　をつけ、純白のワンピースから覗く細く白い足が非常に眩しい。表情も、太陽のように眩しくて俺が溶けてしまいそうだ。

今八歳。俺より五歳年下だ。魔法に關しても才能もあるみたいだ、流石俺の妹　さいいんのり 西院祈里。お兄ちゃんでも良かったのだが、ずっとにいさまで固定だ。

「にいさま、遊ぼうよ」

「よしよし遊ぼう、なにして遊ぶ？」

「よめしゅつとめじゅっ」！

「よーし祈里、ちょっと待ってなさい」

「？」

俺は部屋から出てとある人物のもとに向かう。リビングのソファに堂々と鎮座する黒猫の尻尾を躊躇いなく掴む。

『なああああ！？な、なにをするんだ司月！』

『それはこっちのセリフだクソ猫があ！俺の愛する妹に変な事教えたのはお前だなあ！？』

『っ……そんなわけがなからう！私ではない』

『うちの両親が嫁姑ごっこなんていうどす黒いごっこ遊びを教えるわけねえだろっが！』

『ぐ……！仕方なからう！面白いテレビがあれしかなかったのだ！』

『教育的指導お！』

『にゃあああああ！？』

我が妹に変な事を教えたアナトへの肅正だ、当然のことである。

一頻り戯れた所で、祈里は疲れて寝てしまった。可愛らしい寝息を立て天使のような表情で目を閉じている祈里。今は髪飾りを外して、髪は自然な形だ、変な形がつくといけないからな。頭を撫でてやると、艶やかな黒い髪は触り心地が良い、これは癖になる。

『祈里は寝たのか』

『ああ、寝たよ』

アナトが魔法か何かで扉を開けて入ってきた。そして俺と同じように祈里の頭を撫でる。

『うむ、これは良いな、癖になる』

『爪たてるなよ、大事な妹に傷が付いたら俺はなにをしでかすかわからんからな』

『……一応、私は神なのだが』

『神と祈里、どっちが大事か。俺に聞くか？』

『……善処しよう』

理解してくれて何よりである。

『……魔法学院、だったか』

『えっと……2年後だったな』

『しかし最早習うものはなにもないと思うが』

『まあな……でも一応通わないと体裁的にな』

魔法学院　俺が2年後、15歳から通うのだが、魔法学院から本格的に魔法を学習する。小学校、中学校までは常識は基礎的な知識だ。確かに魔法に関しちや習得済みなんだけど……近所の人から『なにあれ、学校は？』『あれかしら、最近聞く……ニート？』とかひそひそと話されたりしたら精神が保たない。というか、うちの両親なら必ず俺を魔法学院に入れるだろうし。

ま、試験はギリギリに、日々は安穩に。これをモットーにやっていきたい。だって目立つと面倒事しか来ないし、それに有名になつちやうと人混みに紛れて女性のパンてげふんげふん。女性を狙う不埒な輩を見つげるためには有名だと厄介だからな、うん。

決して幼い頃合法的に見れた下着姿（銭湯やら甘えやら危険な服装の綺麗なお姉さんやらやら）が見れなくなったから、とかじゃないんだからな！

『……む、魔力が増えたぞ』

『そりゃあな、果てしない……俺の歩む霸道に並ぶ数々の聖なる物達の行く末を、俺は紳士として見届けなければならぬ使命があるからな』

『……そうか』

なんか関わるの面倒だ、と言わんばかりに興味なさげに丸まって寝る態勢に入るアナト。

『因みにアナト』

『なんだ』

『俺はしましまが好きだ』

『……………』

無視されました。ああん、酷い。せつかくの俺の大胆告白を無碍にあしらうとはな……こう、心にくるものがあるな。まあ、ゴスロリ美少女が『私の下着には興味ないのか……フン、もう知らん』みたいな思考をしながらも『……水玉か』とか考えちゃうんならこの無視も悪くない、いや、良い！実に良い！

「……にいさま？どうかしたの？」

興奮していると、いつの間にもやら起きた祈里がこちらを見ていた。まだ眠気眼で、しきりに目を擦っていた。

「いや、なんでもないよ。それより祈里、あんまり目を擦っちゃダメだぞ。ばい菌さんが来ちゃうから」

「んー……ばい菌さん、やっ」

「そうだろう？なら起きたなら擦らずに、洗うんだよ、わかったね？」

「はい、ごいさま」

敬礼！とばかりに右手を額に掲げる。どこで覚えたのかは知らないが、可愛い。これは素晴らしいぞ、俺の妹萌えが更に加速した。

「ねえにいさま」

「どうした？」

「これけーれーっていうの！知ってた？」

「敬礼って言うんだ、知らなかったよ。祈里は物知りだね」

「えへへえ」

頭を撫でてやるとふにやっとな無邪気な笑顔を向けてきた。ああもう、どうしてうちの妹はこうも天使なの？誰なのこの子を天使にしたのは。もし心当たりがあるなら俺の所まで来なさい、翌日まで妹談義で語り明かそうじゃないか。

「でね、このけーれーって、かいの人がじょういの人にけいいを表すんだって」

變で回してやるからな……フコウ……。

第3話（後書き）

13歳 15歳に変更しました。こっちのが都合がよいので

第4話

皆さんおはようございます。父さんにも殴られた事のない西院司月です。シヅキ、（学校に）いつきまーす！

「おはよう、司月」

「おう、おはよう」

入学式当日……俺は久遠と待ち合わせをしていた。一応腐れ縁で、家も多少近い。ただ、家のでかさは全くもって違うのだが。壬埴家は豪邸だ、うちの家の面積×？くらいあるだろうな、うちだって一軒家なのに……。

「そついや司月、これを見てくれ」

久遠がポケットの中から小さな赤い宝石を取り出した。それを握り締めると指の間から光が漏れ、そして光は杖の形状へと変化した。

「おつ、杖新調したのか？」

「うん、入学祝いだつてさ」

「へえ……って、おいそれ、新開発されてるリーゲル社の杖じゃねえか！」

リーゲル社……まず、杖にはちゃんと製造しているメーカーがある。リーゲル社は杖のメーカーでも絶大な人気を、二十年前から維持し続ける大企業だ。常に他社より一歩先を行く開発力を持ち、安価な

杖から非常に高価な杖まで幅広く取り扱っている。

市場独占も間近とかいう噂があったりする。普通市場の独占はいけない行為だが、他社よりも優位な質の良さを保ち、その結果、独占となってしまうのは仕方のないことらしい。

しかも久遠の持つ杖は、現在リーゲル社が開発を行っているという新しい杖だ。

「動作テストって名目で社長さんがくれたんだ。何度か使ってみたけど、魔法の発動が凄くスムーズなんだ、まるで抵抗を感じない。こんなにすごい杖を開発するなんて流石のリーゲル社だね。杖の名前はグリッサ・ニーザスっていうんだ」

興奮した様子で熱弁する久遠。久遠は結構な杖オタ。新しい杖とかマイナー、限定品、製造中止になった杖とかを見ると興奮を抑えられないらしい。

因みに俺の持つてる杖はエミス社製。老舗で、安価な杖を扱っている。正直、俺にとって杖ってのはただの誤魔化すアイテムでしかないので、金をかけるだけ無駄。

「久遠君、西院君、おはよう」

「おはよう瑞波」

「おはよう」

紺のスカートから覗く足が俺の視線を釘付けにする。ニーソックスという神器を開発した人は絶対素晴らしい人だと思う、あれこそ神

様だろう。ニーソ神。それをまるで自分の体の一部だと主張するが如く履き熟し、その絶対領域は正に紳士ホイホイ。

優しげな瞳はパッチリしていて、肌はきめ細かく美しい。非常に整った顔立ちの彼女　　くるすみやみずは来栖宮瑞波は、久遠の幼なじみだ。

未だに黒髪ロングの彼女は、礼儀作法などは勿論、料理も上手いらしい。まさに大和撫子である。

因みに来栖宮も名の通った家系だ。壬埜家には追いつかないが、魔法に関しては闇以外の属性に才能がある。姉がいるらしい、来栖宮さんよりも二歳上で魔法学院生だとか。

名家の子が二人と変態紳士というアンバランス過ぎる組み合わせ。なにこれ格差社会。

……ああ、そして残念な事に、ヒツジョーに残念な事に、来栖宮さんは久遠にホの字ですハイ。ま、そうなるのは腐れ縁の俺ならわかる。久遠は最初、虐められていた彼女を助けたのだ。まあその虐めというのはあれだ、低学年ならではだな。好きな子を虐めちゃうア

レ。

一度助けてからというものの、来栖宮さんは久遠に引つ付いてきて、それがずっとだ。来栖宮さんが炊事に関して万全なのは、多分いや確実に久遠の嫁になるためだろうな、ああクソっ、イケメン呪われる。

……俺は周囲の人間から『金魚の糞』『才能を盗られた残りカス』『身から出たブサイク』と色々言われています……身から出たブサイクってなんだよ、ひでえよ畜生……。

良いもん！色々な家系の美少女から上から目線で罵られるなんて紳士にはご褒美だもん！それで足蹴にされて、地に伏せるも、見上げた時にその足蹴にしてきたふつくしい足の付け根と聖なる逆三角形がチラリと見えた時にはもう俺の股間がサイヤジ　　え？男からの罵り？ハツ、糞食らえだ。

「おい司月ー、おいてくぞー」

「え？あつ、おい待て！」

思考したせいで二人が先に行っている事に気付かなかった。俺は遠くでこっちに声をかける二人に走って追い付く。

「いつ見てもでけえなあオイ……」

壮観である。門前だというのに校舎までは遠い。その巨大な校舎はまるで要塞の如く。だが美しさは正に城のように清純で、穢れを感じさせない。校舎は大事だ。校舎が綺麗だったり、学生の目を引く物があると、そこに入学したくなる。

願書を貰いにきた時は数分間その壮大さに固まったほどだからな。因みに俺はちゃんと受験して受かったよ。他二人は推薦……というか名家の二人なので寧ろ魔法学院側が入学してくれ、と頼んだんじゃないかと思う。

敷地内に一步踏み入れる。すると俺たちの周囲の空間が歪みだし、別の風景に変化した。一切出入り口のない部屋。部屋の上には窓があり、日の光が射している。確かこれは空間魔法か。

「司月、瑞波。あそこに何かいる」

俺達に向かい立つように存在している何か。良く見れば、それは人型をしていた。だが目や鼻などのパーツはなく、形だけ人になった他の何か、だろう。

『あれは試験用魔導トークンだ。決められた行動を忠実に実行することしか出来ん』

頭にアナトの声が響く。アナトはずっと俺の肩に乗りながら寝ていたのだ。因みに他二人には見えていない、所謂不可視状態だ。『私は神だぞ？人間の視覚情報など自在に操れる』と無い胸を張りなが

ら言っていたのだが、確かに、流石神様である。因みに俺も不可視魔法はある、が、アナト程精度は良くない。

俺の場合視界に映らなくなるくらいだが、アナトの場合は最早そこに居るのだが、居ないという状態だ、確か……『存在確率を弄るだけの簡単なお仕事』とも言ってたな。

『んじゃあこれは俺達を試すために学院が用意したって事かね』

『そうだな。この空間は学院と繋がっている。脱出手段を巧妙に隠してはいるが……私には無意味だな』

『流石カミサマ、強可愛いな』

『……………フン、これくらい当然だ』

とか言いつつ尻尾をフリフリしている。結構嬉しいようだ。神様も可愛いなあ。

『だとしたら真面目にやる必要はないのね』

『そうだな。あの二人程度ならあんなトークンを屠るなど簡単だろう……む、トークンに魔力が通った、動くぞ』

『リョーカイ』

「っ、動いたっ」

久遠が叫び、全員が杖を構えた。黒い人型は、腕を剣のように変形させた。

『接近型とみた。ただし、形状変化出来るのだから、何をするかはわからん。だが他に双剣・槍はあるだろう。大した敵ではないにして、距離を取るに越した事はない』

『オツケー』

黒い人型が接近してくる。だが、近付く事は叶わなかった。

一陣の鎌鼬が飛び、黒い人型を切り刻む。そして同時に風の弾丸が黒い人型に直撃、吹き飛ばした。

あー……うん。

『ふむ、風の第二精霊か。中々使い熟すじやないか、あの娘』

周囲に風を纏う小さな妖精が、来栖宮さんの隣で浮いていた。あれは風の精霊だ。召喚魔法の一種だが、本体と契約することで召喚のプロセスを全排除、一瞬にしてその場に顕現させる事が出来る。精霊の契約にはそれぞれの属性主の許可が必要になる。

その中でも来栖宮さんが召喚したのは第二精霊【シュツルム】。体は小さいが、力が収束されており、召喚出来る者にそれなりの力がある事の証明になる。

……と、アナトが教えてくれた。え？俺が自ら勉強なんてするわけないでしょ？大丈夫、アナトには俺の記憶に一瞬で記憶を刻む力がある……というか神様全般にその能力があるらしい。流石神様。

「ありがとうシュツルム。助かったよ」

『
』

来栖宮さんはシュツルムの頭を撫でる。嬉しそうに笑うシュツルムは、一陣の風となってその場から居なくなつた。

『魔力消費も無駄が少なく、意思疎通のタイムラグは0.83秒。うむ、精霊使いとしての素質はあるな、流石来栖宮、名家の娘か』

神様の解説が凄い専門的というかなんとというか。ただ、神様の与える知識のせいで理解出来る自分がいる。もう随分こつちに染まつちやつてるなあ俺。

黒い人型は消滅した。そして俺達の周囲の空間が歪み、校舎前の景色へと変化した。

『クリアおめでとう。君達のクラスは1-Aだ。1年生の教室は3階にある』

そんなアナウンスが響いた。クラス分けの仕方はどんな分け方なんだ？三人全員一緒かよ。

「まあいいや、兎に角向かおう」

「そつだね」

「可愛い子いるかなー」

「司月……お前はそればかりだな」

「そりやお前、これが男つてもんだろ。ただ他の男よりちよつとオーブンなだけで」

「ちよつと……？」

「もう、西院君つたら……」

呆れる二人に、俺は笑みを浮かべる。こんな感じで会話しながら俺達は教室へと着いた。

(うわ……)

『ふむ……』

A組の教室は酷い有り様だった。名家のご子息ご息女がずらーり。中には12歳以下の子供が挑む事が出来る魔法による戦闘大会ジュニアトーナメントで上位にいた連中もいる。なにこれ、A組ってエリート候補が集まってんの？

「壬埼久遠君に、来栖宮瑞波さんか。ま、そりや君達がこのクラスに来るのは当然だね」

そうやって、俺なんか眼中にないように話すのは霧島千桐^{きりしまちとつ}。茶髪で、キリリとした顔立ちは隙の無さを感じさせる。こいつの家も名家。氷属性に関して類い希なる才能を持つ。だが名家としては歴史が浅い家系ではある。

性格が悪い……とは言わないが、こいつは家名で人を選ぶ。確かに、壬埼家や来栖宮家と仲良くなっておけばのちのち色々し易くなるだろっしな。

「……やあ、霧島。君もA組か」

「勿論、僕は霧島家の人間だからね、A組にいるのは当然さ。で」

そこで俺に視線を向けた霧島。二人に向けていた媚びへつらうような視線とは全く違う、まるで興味もない、ただの害虫を見るような冷たい視線だ。

「何故お前のような奴がここにいる？」

教室にいる連中が、俺に視線を向けてくる。まあそうだろうな、こんな才能・実力のあるクラスに金魚のフンが混じるんだしな。

「っ、あのなあ……！」

「いやあそれが俺にもわからないんだよね。きっと学院側もミスなんじゃないか？ たかが俺如きがA組なんてね、身分不相応過ぎるよ」

怒る久遠を制し、俺はにこやかに言った。すると霧島は目を細め、更に強く俺を睨む。

「ふん……反論する事出来ないなんてな……壬崎君、友人はしつかり選ぶべきだよ」

と、言い残すと、霧島は教室を出て行った。今からどこに行くんだあいつ、トイレか？

「司月」

「さあさあ二人とも、さつさと席に座ろうぜ」

久遠と来栖宮さんに笑みを浮かべて言う。俺が暗に含めた、これ以上この話はするな、という意味を察したか、二人はそれに従ってくられた。黒板には席は自由と書いてある。俺達は窓近くに三つ席があるので、そこに座った。

久遠が一番前、その隣が来栖宮さんで、俺は久遠の後ろの席だ。窓際か……良いポジションだ。窓から見える、運動をしている女生徒達を見るのは退屈な授業時間内にある至福の一時である。一生懸命走る彼女達。薄く、短い丈の体操着……それは汗に濡れた時、真価を發揮する。

体操着は吸水性が良い。体に張り付くことはないが……水のせいで下着がうつすらと見えてしまう場合があるのだ。これは体操着のメーカーの謀略である。が、そのおかげで我ら紳士同盟はホクホク顔なのだ。

「……そんなに校庭見つめながらニヤニヤして、どうした？」

「え？ああ、いや……外には綺麗な景色が広がるなあ、と」

「……………?」

良く理解してない様子の久遠。いやそれで良いんだよ久遠君、君は理解する必要がないし、俺も理解させようという意図がないから説明をバツサリカットしたし。ただ、隣の来栖宮さんのジト目が俺を貫く。美少女のジト目はご馳走ですよ、ありがとございます。

『…………この気配は…………？』

『どうしたんだ？』

アナトがそわそわしだした。神様がそんなにそわそわするなんて、何事だよ。

『いや…………非常に膨大な力を感じたのだが…………それが突然教室の前に現れたのだ』

『どういう事だ』

『私にもさっぱりだ…………』

ガラスと教室の扉が開いた。その時、アナトが嘔き出した。そこに居た人物…………それは美しい銀髪の女生徒だった。その黒いの瞳はまるで全てを見透かすかの如く。肌も白く、まさに雪の精霊のようだ。

クラスの連中は、この人物を知らないらしくざわめいていた。なんだなんだ？名家の人間じゃないのか？

『デイ、デイ、ディアナ！貴様なぜここに居る！？』

アナトが慌てながら言う。ディアナ…………ってなんだっけ。でもアナトが慌てるってことはつまり…………？

『来ちゃった』

テへ、とでも言うかのようにこちらにしかわからない程度のウィンクをする女。一体…………どういうことだってばよ？

神界、フリズスキャルヴ内円卓会議室。

そこには多数の神が席についていた。司月に力を貸す、アナトを除いた8柱は勿論、司月に興味を抱いているその他2柱も席についている。円卓の真ん中には青く透き通る巨大な水晶玉が浮いており、そこには司月の保有する力の大きさが示されている。

「ぶえつくしゅ！」

そんな荘厳な雰囲気を持ち壊した神

ロキ。彼 または彼女

は、自らの中性的で美しい容姿などまるで興味ないかのよう
に、人差し指を鼻につっこんでいた。

「あゝー、辛えー」

「なんだロキ、神風邪か？」

「いんやあ、鼻ほじつてた時指突っ込み過ぎて鼻が過敏に反応しやがった」

「あー、わかるぞその気持ち。しかも偶に鼻血がでる」

「そう、そうなんだよ！流石トールのおっちゃん、話がわかるなあ」

ロキに対して賛同した、雄々しき髭を蓄えた巨躯の男、トール。等の本人は耳掻きで耳クソを掘り出している。

「ハツハツハ！鼻にゲイボルグが入ってきたことがあるからな！痛みはよくわかる」

「うっさいわよクソ男ども」

円卓に足をかけている非常に態度の悪い、漆黒の髪を持ち、見る者全てを魅了してしまうほどの容姿を持った女神　　カーリーは、二人を睨みつけながらそう言った。

「やーいやーい腹踊りばばあ」

「ロキイ！」

カーリーがロキの挑発に対し怒り心頭するが、席から立ち上がることはしない。

「静かになさい。もうすぐ来るわよ」

と、中性的で、赤い髪をもつ伶俐な女神、ミネルヴァが言った。途端に黙るカーリー。カーリー自身、階級という意味ではミネルヴァと同じだが、大人びた様子などから、ミネルヴァには一切頭が上がないのだ。

そこで、何者かが部屋にワープしてきた。手には槍を持ち、王冠をもつ、純白の立派な髭を蓄えた巨躯の男。

「オーデイン様、こちらは全て揃っております」

キリリとした態度の男、ヴァーユが言った。するとオーデインと呼ばれた男は、円卓の一つの席にどかと座り、口を開いた。

「そっか」

.....。

誰しもが黙りこくった。

「い、いやお前らッッ」ぶぶッ!？」

突如オーデインの横に現れた岩で出来た手がオーデインを叩いた。

円卓会議場の壁を貫いて飛んでいくオーディン。因みにここ、フリズスキャルヴは全面【グランフェイバー神天鋼】というオリハルコンすら足元にも及ばない素材で出来ている。

「さあさあ、皆さん。会議を始めましょうか」

そう言ったのは皆のママンことガイアである。今オーディンを吹き飛ばしたのもガイアである。夫ではないものの、親友という間柄であるため、そのツツコミは過激。

にこやかに笑うガイアに、ガクガクと体を震わせる数柱の神。その他は、楽しそうな表情を浮かべたり別段反応しなかったり。

「いててて……いきなり吹き飛ばすなよー、頬が赤くなっちゃった」
ワープしてきたオーディンが、頬をさすりながら言った。人が食らったなら当たった瞬間空間がその衝撃に耐えられず、空間ごと消滅するくらいの威力である。

「では、彼。西院司月君についてですが」

「あー、うん。ごめん、俺が悪かったから構って」

と、涙目になりながらいう主神オーディン。威厳も糞もない。

「ガイアねえちゃん。そんな奴無視してさっさとやろうぜー」

「んだとロキー！」

「股間の槍は短いくせにー」

「んなあつ!?!」

「やーいやーいお前の神馬六本脚ー」

「ぐぬぬ……」

「いや、スレイブニルは仕方ないだろ」

と、冷静に突っ込んだのはスプンタ・マンユである。伊達メガネをかけた神様だ。

「ロキちゃん、これは大事な会議だからしっかり聞きましょうね」

「あいあい」

ガイアの言葉はしっかりと聞くロキであった。そこでガイアは自身の書類を手に、報告を開始する。

「えー、アナトからの定期報告によりますと、彼 西院司月君は、力の乱用はしない、極めて賢い子のようです」

そこで中央の水晶に司月の能力データが数値化、グラフ化されて現れた。

「これが、現状の彼の能力となります」

「はー……まさか神力が既に下級神並みだあ、恐れ入るわねー」

頬杖をつきながら淡々というのは、オレンジ色の長い髪を持つ美し

い女性、ヴェルダンデイである。扇情的な姿は、みるものの視線を釘付けにしてしまう程だ。

神力 それは神のみが扱える力である。本来ならば神として生を受けたもののみ宿り、人々の信仰によって日々増えるものである。が、司月は、神と関わりを持ち、神の力を受けて魔力を得ているため、契約している神の神力の一部が流れているのだ。そしてここに集まるは全て上級神以上である。

「に、してもだ。なんだあの性力。また伸びてねえか？」

言ったのは黒い髪に銀色のメッシュが入っている男、アンラ・マンユである。

グラフの伸び率がもの凄いことになっていた。ひと月ごと、年ごとにあるが、日を追う度にでかくなっている。勿論、それに比例して魔力も高くなっていた。

「本人も自覚しているみたいですね」

「冷静だなこの少ねグボツ!？」

また岩の手に叩かれて吹き飛ばすオーデイン。フリススキャルヴに二つ目の穴が開いた。

「今回、これらのデータを見て、協力しようと思う方は？」

そこでカーリーとミネルヴァ、二柱が拳手をした。どちらも興味を抱いていた二名で、つまり今回の会議にきたまだ力を貸していないかった神全員が力を貸すことになる。

「では決まりですね。今回の会議はこれで終わり、ということでは？」
皆が席をたち、各々自由にその場からいなくなる。

.....

「よしやつと帰還……って、あれ？」

オーディンが会議室に帰るが。だが、閑散としていた。

「……あらー？オーディン様ですかー、おはようございますー」

「うん？あー、うん。おはようルサルカ」

一柱だけ円卓にいた。それは水色の髪を持つスタイル抜群の女性、ルサルカだった。

「皆様帰られたようですねー」

「そうだな……くそう、除け者にしやがってからに」

オーディンはその場から一瞬にして消える。それを見送ったルサルカは優雅な動作で欠伸をしたあと、ハツとした表情を浮かべた。

「そういえばー、ディアナが人間界に降りましたねー……ふあ……」

ルサルカもその場から消える。神の会議……こんな会議や神では、信仰など無くなってしまふのではないかと、考える神は一柱として居なかったそうなの。

「それで、日掘さんはアメリカから来たんですね」

「ええ、帰国子女よ」

銀髪の美少女、日掘樹理華ひほりきりかさんは、久遠や来栖宮と楽しそうに会話している。アナトが、その様子を心配そうに見つめていた。日掘樹理華さん　本名ディアナ。アナト同じ神であり、狩りを司るらしい。人間という、創造主の予想を遥かに超える成長を見せる存在に、興味があるらしい。今回、ほぼお忍びでこっちにきたようだ。

因みにアナトとディアナは友人（友柱？）とのこと。共に戦いに関しての力を有しており、何度も神獣との戦いで背中を合わせて戦ったんだとか。アナトはあらゆる武装を使える臨機応変タイプ、ディアナは弓オンリーだが、その華奢な腕で持つ神弓から放たれる矢は半径100kmを無に帰すとか。その度にいろんな神様が修復しているらしい。

ここに、さも当然のように馴染む神様。知っている側からすれば、非常にシユールである。

『で、ディアナ。お前はどつするつもりなのだ？』

『どつするって？』

『この人間界でどついう事をしたいのか、という事だ』

『さあねー。ただ、神一倍ここを遊んでやるわ』

なんだよ神一倍って……ああ、人じゃないもんな。あんまり納得出来ないけど。

『人と子を成すっていうのも有りっちゃ有りねー、例えば……その司月君とか』

「ぶっ！」

俺は嘔き出してしまった。そんな俺を見る回りの連中。

「どつした司月」

「いいい、いやなんでもないただのクシャミだから気にすんじゃねーバカヤロー！」

「なんで怒ってんだよ!？」

ただの八つ当たりです。ディアナ……ああ、日掘さんだった。日掘

さんは悪戯成功、と言わんばかりにこちらに不適な笑みを向けてきた。畜生……いや、待てよ？あんな美人に手玉に取られる………？
………おおっ！これは素晴らしい！妹系を支配するのも良いが、麗しいお姉様系にリードして貰うのも俺は好きだぞ！

「エスとエムの共演……まさに至高ですな」

「エスとエム？」

おんやあ？口に出していたみたいだ。俺は不審そうな視線を送る久遠と来栖宮になんでもないという旨を伝える。なんとか納得してくれたみたいけど………口に出しちゃうと末代までの恥になりそうで怖い………ん？俺が末代だつて？おい言つた奴出てこい！そのキレイな顔をフツ飛ばしてやる！！

「おるあ、HRはじめっぞー」

そうしている間に、教室に教員らしき人物が入ってきた。巨軀でダンディな男である。真っ黒なスーツに、濃い赤色のネクタイ。見る人の大体が、この人をどこかのSPやボディガードだと思うだろう。彫りが深く、顔は外人顔だ。股間のSPもさぞダンドげふんげふん。

「俺の名はルース・ヴァルバティア。今日からこのA組を担当する者だ。名前が長いから、ルース先生と呼んでくれ。んで隣が………ん？」

手で自身の隣を指すがそこには誰もいない。ルース先生は、自らの額を人差し指で数回叩いたあと、ドスドスと歩きながら教室を出て行った。

『羽秋先生』

『ひっ！？すみませんすみませんごめんなさい謝りますから食べないでください！』

『……………』

『わあっ！？掴まれたぁ！後生です、後生ですから食べないでえ！』
ポイツと。

まさにそんな擬音が似合うように教室に投げ入れられる女性。尻餅をつきながら立ち上がったその人。紺色のスーツに、同色のタイトスカート。化粧は薄そう。顔立ちは地味な感じだが、綺麗な人だった。髪は茶髪で、後頭部で結っている。

「あいたたたた……………」

「羽秋先生、教室ですから挨拶してください」

「う……………？……………はっ！？ああ、ど、どど、どうも！ほ、本日はは、お日柄も良くう！」

生徒たちがじいつと見ている事に気付いて素早く立ち上がりながら口を開くも、どもりまくる先生。それで先生が務まるのだろうか……まさか新人か？しかし……可愛い、なんか獰猛な動物たちの檻の中に放り込まれた小動物みたいだ。

「深呼吸してから、名前を」

「ふい！？ああ、はい。ひっ、ひっ、ふうー」

それラマーズ法……とツッコミたかったのだが、多分ツッコんだら負け。ここは衝動を我慢する。

「ええっと……はねあきしほめ羽秋燕と言います。今日から、このA組の、副、担任です。教員歴は今年が初めてですが、どうぞ、宜しく御願ひします……」

ぱちぱちぱち……と拍手は俺達と、あとは数名だけ。それ以外は羽秋先生を睨むように見ていた。先生視点に立つと、これだけ多数の視線に貫かれるのは精神的に辛いものがある。

ま、あのルース先生がベテランそうだから、バランスは良いのだからうけど……ここはA組、なぜだかエリートが多数集まるクラスだ。新人に副担任を任せるとするのは少し酷いのではないかと思う今日この頃。

「さてまあ、紹介が終わった所で早速だが」

ルース先生はニヤリと笑みを浮かべて、教卓を力強く叩いた。

「模擬戦といこうじゃないか」

第4話（後書き）

ロキ「そっいやフェンリルはまだ産まれないんかねえ……ま、いいや、面倒く……ふ、ふあ……ぶえつくしやいチキシヨイ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1663y/>

最強の脇役の人生

2011年11月16日21時59分発行